



文学部図書室

明治39年9月、文科大学が開設されて以来60年、24講座から現在39講座に増加し、収集された蔵書は、昭和41年現在、洋書23万余冊、和書約24万冊計47万余冊と学内随一の多数に達している。その中には、内田、桑原、池田、クラーク、尾崎、米田、田中、須原、岡嶋、朝永、西田、金倉、今西、鈴木、狩野、田辺等々諸先生方の研究に寄与した貴重な蔵書が、それぞれ文庫として収蔵されている。

図書室は、図書整理室および哲学科、文学科、史学科の三つの書庫とそれぞれの閲覧室を有し、書庫は研究上の便宜を考え、接架開放式をとり、本学部の教官、学生は自由に書庫に入って図書を検索することが出来る。

カード目録は、洋書は著者名、和書は書名を主とした目録を備え、哲学科閲覧室には文学部全体の総合目録がある。また学部図書館員の努力の結果、昭和23年からは、NDCによる分類目録を備え、冊子目録(図書月報および特殊文庫目録)も作成している。

このような歴史と伝統をうけついで来た図書室も、時の流れと共に様々な問題が起きて来ている。

第一に、昨年新築されて近代化した史学科を除いて、書庫の建物が大正初年のままで、通風、採光共に悪く、殊に未だ白熱灯を使用しているため、書架のぎっしりつま

った書庫内は検索にも差支える程の暗さであり、また満腹状態の書庫に年々増加する図書を収蔵するスペースにも掛員は頭を痛めている。場所の狭あいは書庫のみにとどまらず、図書掛員23名(定員16名、非常勤7名)の大所帯を擁する整理室も、これ以上は書架1台、机一つもふやせないぎりぎりの状態であり、また雑誌類を各研究室に分散収蔵しているため、利用に甚だ不便を訴える声が多く、雑誌室の設置が強く望まれているが、これも場所の無い関係で不可能に近い。また現人員を以てしても、年々1万数千冊におよぶ増加図書の受入、整理、書庫の整備に追われて、研究図書館としての重要業務である参考事務にまではとうてい手が回りかねているような現況である。図書館の近代化、業務の機械化等が問題になっているが、現在では掛員一同の努力にもかかわらず、受入れた図書の印刷カードがカード箱に挿入される迄には約1年から1年半を要するような状態では、近代化、機械化もほど遠いと言わねばならない。以上のような種々の問題をかかえながらも何とかして少しずつでも解決に努力し、どうすればより一層迅速に図書を利用出来るようにするかが、研究と教育を支える陰の力として働く図書室の使命であり、課せられた今後の問題であろう。



あとかき 1966年もあとわずか。お正月を郷里でむかえようとか、冬山へとか楽しい計画をたてていらっしゃると思います。

皆様方との Communication の場としての館報もよりよいものにするため、編集員一同、計画をたて、奮闘して来ましたがまだまだ問題点はあります。

皆様方のきたんなき、ご意見・ご感想をどしどしお寄せ下さい。

京都大学附属図書館報「静脩」Vol. 3, No. 5 (通巻13号) 1966年12月20日発行・発行人岩猿敏生
発行所 京都大学附属図書館 京都市左京区吉田本町 電代表77-8111 (内線) 2220-2238